

第Ⅱ章 発掘調査

Ⅱ—1 0304 調査地点

1. 遺跡の立地と周辺地形

本調査地点は、本荘北地区に所在する本庄遺跡内にある。本荘地区は、白川の蛇行が見られなくなり下流域に差し掛かる地点にあり、白川左岸の自然堤防上（標高14m）に立地する。

本荘北地区では校舎や病棟の新営に伴い、比較的規模の大きな調査が行われている。その既往の調査で古墳時代前期から古代にかけての集落が確認され、一昨年には弥生時代前期初頭の溝も検出された。遺構の分布は、白川に近いほど濃密であることが分かっている。

2. 調査の概要

平成14年度末に計画された基幹・環境整備事業である。本荘北地区大学附属病院の設備管理棟北側に、発電機室を建設し、発電機室から共同溝を敷設し既設の共同溝（0104調査地点）に繋げる工事である。

既設の建物を解体・撤去したのち、掘削を行い調査を実施した。なお、調査区の形状が不定形であるため、以下説明の便宜上、東側広い部分を東側調査区、東西に伸びる部分を調査区東西部、南北に伸び若干幅広い部分を西側調査区とする（図3）。

<調査面積>

333.5㎡

<調査期間>

2003年6月2日～7月2日

<調査員・参加者>

大坪志子。

伊藤千代子、岡田イツ代、押方富江、河野義勝、黒木重信、黒木タケ子、白石美智子、溜渕俊子、西 信二、林田恵子、早田咲百合、福田久美子、堀川貞子、前田和子、前田宏一郎、前田日出男、松井昭子、松本和徳、水上順子、桃井哲夫、森川征子、森川護、森田登、森みどり。

3. 調査の結果

a 基本層序（図3）

本調査区は、全体的に遺構面である地山直上まで近・現代の削平が及んでおり、また、配管工事が周辺で行わ

れ遺物包含層もほとんど残っていなかった。調査区東側では削平が顕著で包含層の遺存はなく、西側部分で残っていた。調査区の北縁で観察すると、東端では道路舗装のためのバラス（54cm）下がすぐ地山である。東から1/3ほどの地点では舗装面・バラス（35cm）・埋土（30cm）の下が地山である。西側M92付近では舗装面・バラス（40cm）・埋土（70cm）（部分的に遺物包含層）で地山となる。地山は西側に向かって傾斜しており、東側に比べると削平の程度は少ない。

b 検出遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、古代のものと考えられる竪穴住居址2基、掘立柱建物と思われる柱穴群、古墳時代前期の溝1条、弥生時代の溝1条、近代の溝1条である。

<竪穴住居址>

1号住居址

東側の調査区の中央、やや南西部で検出した。住居址の北西角部分のみで全体の規模などは不明である。住居址の軸は南北から若干西へ振れている。遺物は土師器の細片が数点出土したのみである。

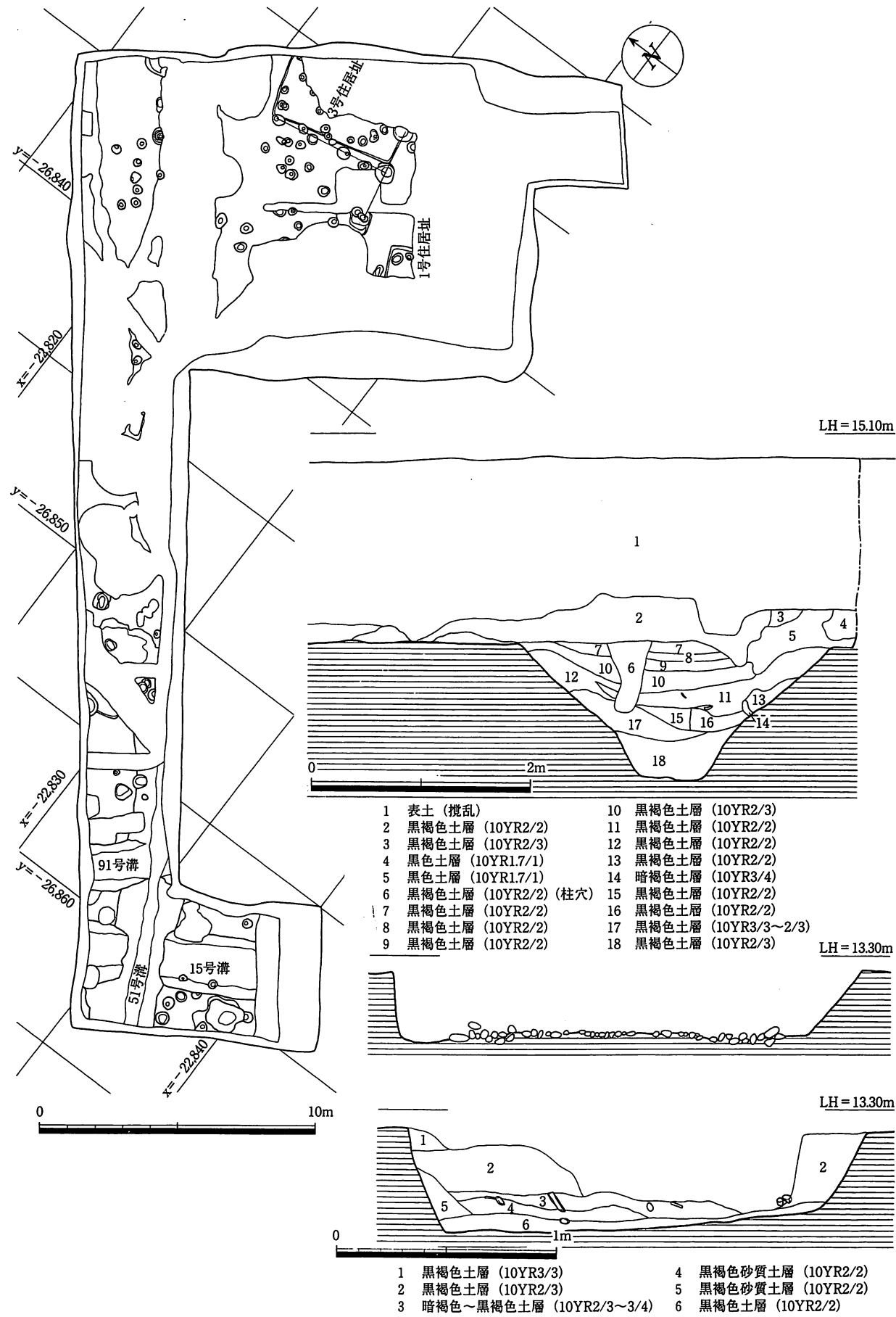
3号住居址

東側調査区の東壁中央付近で検出された。全体の西側1/3程度を残すのみである。削平され、2～3cmの深さしか残っていないため、時期を確定できる遺物は検出できなかった。南北は4.8mで、おおよそ5m四方の竪穴住居址だったと思われる。住居址の軸は、1号住居址同様に西へ少し振れている。9901調査地点で検出された集落の状況では、古墳時代の住居址は一辺が4～7mと概して大きく、軸の方向はばらばらであるのに対し、古代になると小型化し、また大型のものも含めて住居址の軸はおおよそ南北に揃うということが窺える。このことからすれば、3号住居址、1号住居址は古代の住居址と思われる。

<掘立柱建物址>

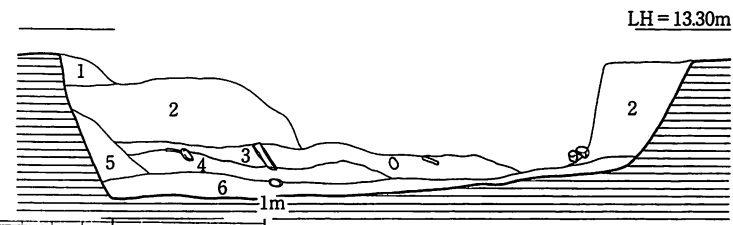
西側調査区の中央付近で検出された。わずかに西に触れるが、おおよそ南北に並ぶ柱穴が2列ある。また、一部重なって、東西に並ぶ大型の柱穴が3つ確認できる。南側大きなものが先で、小さなものが後に掘り込まれている。小さいものは、古代の建物址と考えられる。0119

图3 0304調査地点遺構配置実測図・調査区西壁土層断面実測図・15号溝敷石断面図・15号溝土層断面実測図
(1/200・1/50・1/25)



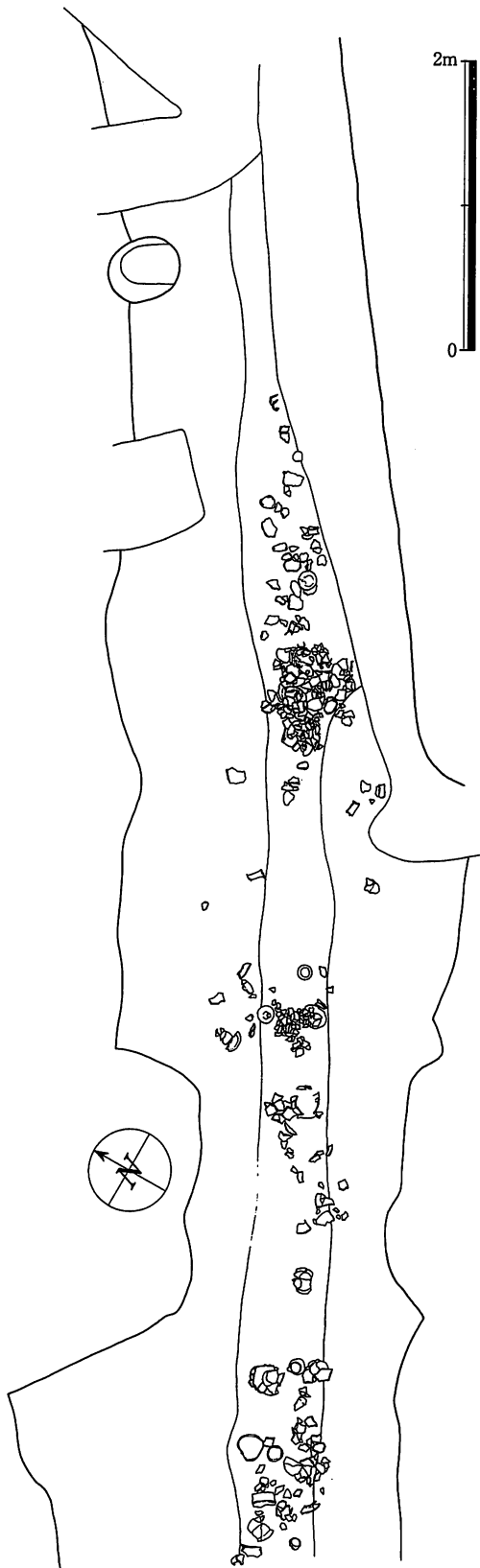
- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1 表土(攪乱) | 10 黒褐色土層 (10YR2/3) |
| 2 黒褐色土層 (10YR2/2) | 11 黒褐色土層 (10YR2/2) |
| 3 黒褐色土層 (10YR2/3) | 12 黒褐色土層 (10YR2/2) |
| 4 黒色土層 (10YR1.7/1) | 13 黒褐色土層 (10YR2/2) |
| 5 黒色土層 (10YR1.7/1) | 14 暗褐色土層 (10YR3/4) |
| 6 黒褐色土層 (10YR2/2) (柱穴) | 15 黒褐色土層 (10YR2/2) |
| 7 黒褐色土層 (10YR2/2) | 16 黒褐色土層 (10YR2/2) |
| 8 黒褐色土層 (10YR2/2) | 17 黒褐色土層 (10YR3/3~2/3) |
| 9 黒褐色土層 (10YR2/2) | 18 黒褐色土層 (10YR2/3) |

LH = 13.30m



- | | |
|---------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色土層 (10YR3/3) | 4 黒褐色砂質土層 (10YR2/2) |
| 2 黒褐色土層 (10YR2/3) | 5 黒褐色砂質土層 (10YR2/2) |
| 3 暗褐色~黒褐色土層 (10YR2/3~3/4) | 6 黒褐色土層 (10YR2/2) |

図4 51号溝遺物出土状況 (1/50)



調査地点では直径が1 mを超える大型の柱穴列が確認され、これは、古墳時代の大型建物の柱穴群であることが判明している。本調査区の柱穴も方向及び規模が0119調

査地点の大型建物とほぼ一致しており、本例も古墳時代のものと考えられる。

<溝>

15号溝

西側調査区の中央を貫く、北西—東南に走る溝である。現状で幅約2.2m、深さは0.6mである。埋土を除去し遺物包含層の上面レベルで検出した。溝の南端部を深さ0.25mほど掘った所で、3～5cmの玉砂利が敷き詰められているのが確認された。南端から北方向に2mほど広がり、それより北は部分的に残っている状態である(写真3)。石は大きさや形状を揃え、丁寧に隙間なく敷いている。この敷石の下には、水的作用によると思われる鈹物を含む硬い層が厚さ20cmにわたり堆積している。敷石の間からは近代陶磁の破片がかなり出土し、素焼きの人形なども出土した。掘削後、一定期間使用した後に敷石を敷設したようだが、石が何のために敷かれたのかは不明である。

51号溝 (図4)

西側調査区の西北隅付近から、調査区西南部にかけて南西—北西に走る溝である。15号溝と直行する。現状で幅約2.3m、深さは約1mである。底の幅が狭く、断面は逆台形かV字を呈する。周辺のこれまでの調査と同じく、この溝からは古墳時代前期の土師器がまとまって出土した。器種には甕・高坏・小形丸底埴・手捏土器・大型壺などがあり、特に甕が多い(図5・6:1～6)。

91号溝

15号溝の東側1mの地点に、15号溝に並行するように走る。51号溝を検出したレベルでは確認できなかったが、51号溝の壁が一切り取られたように確認できない部分があり、その上部を15cmほど下げたところで確認した。現状で幅約1.7m、深さ約1mで、断面は逆台形である。51号溝との交差部分で、51号の遺物の乱れがないことから91号溝が先行する。溝の上部と底から30cmほどのところで、弥生時代の土器が3点出土した。板付I式の壺形土器と思われる頸部～肩部の破片と底部片である(図6:7)。0104調査地点で検出された125号溝と繋がるようである。

<その他の遺構・遺物>

調査区東西部の中央付近で竪穴住居址のような窪み状の遺構があった。埋土は古墳時代よりも古い様相で、弥生時代か縄文時代の竪穴住居址とも考えられるが、大半を攪乱によって失い、遺物もなく、詳細は不明である。

遺物としてはこのほかに、縄文土器や弥生土器の破片や黒曜石の破片等がある。

图5 0304調査地点出土遺物1 (1/4)

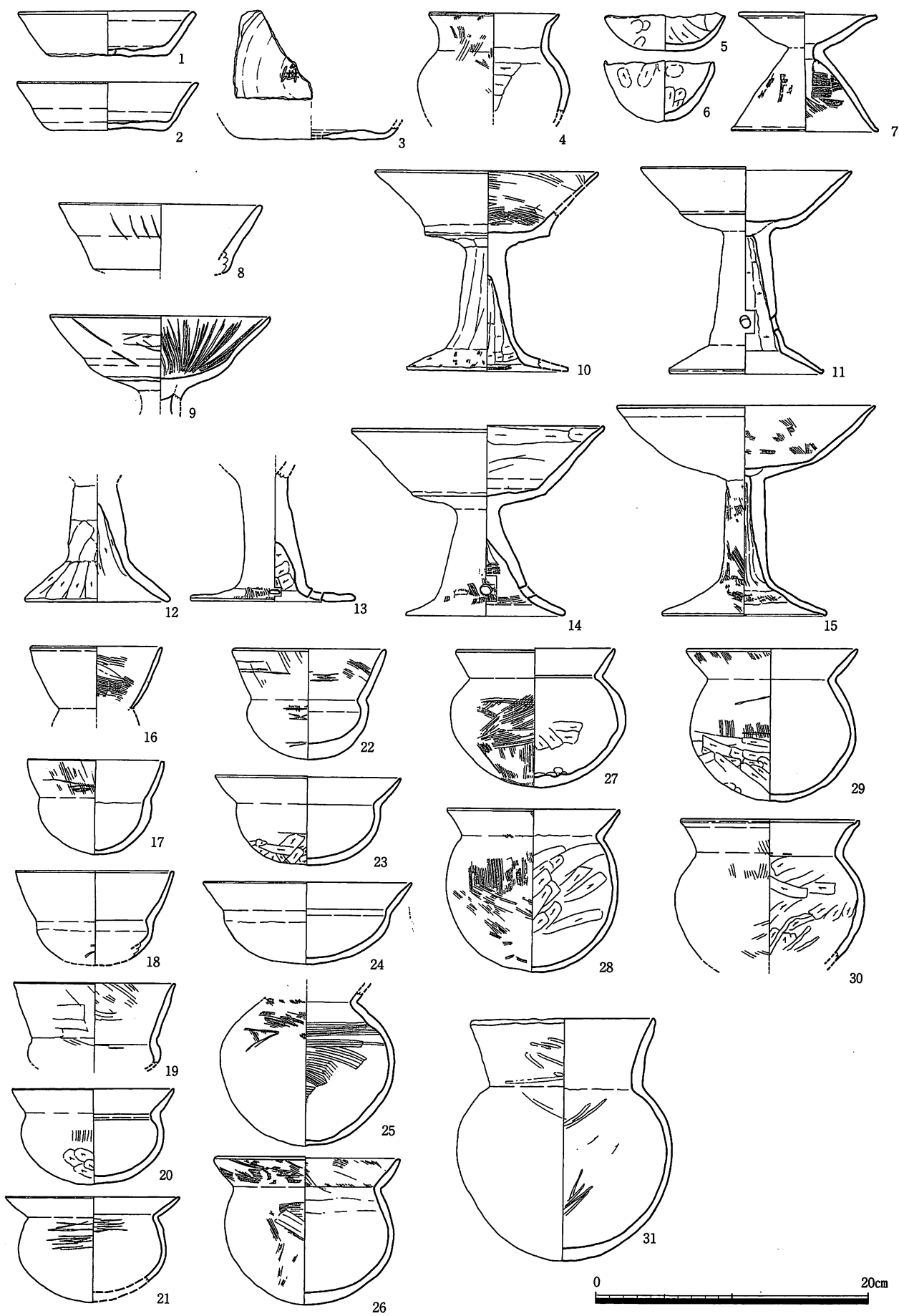
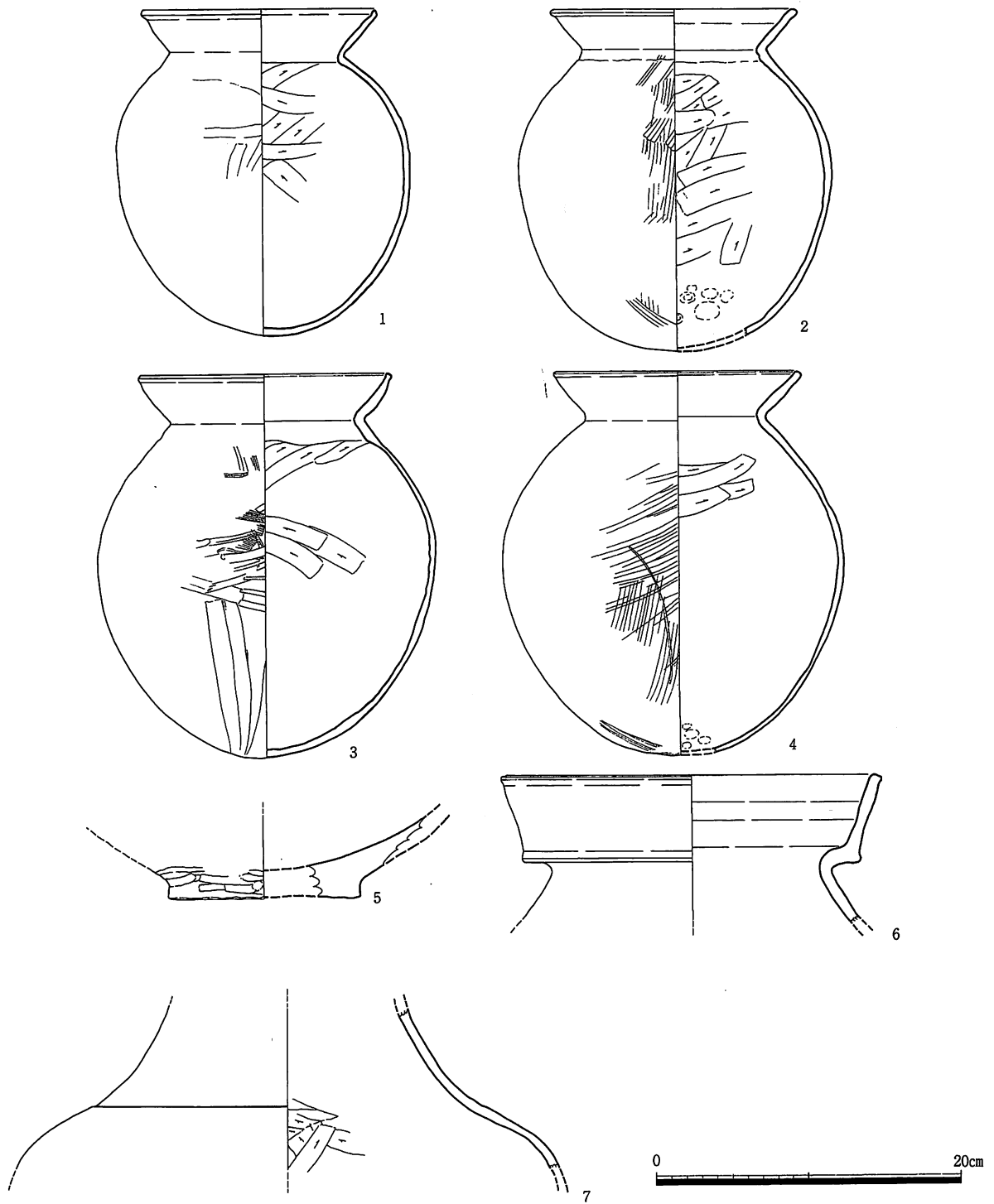


図6 0304調査地点出土遺物2 (1/4)



4. 成果と問題点

今回の調査区は、削平・攪乱による遺構面の破壊が多く、当初予想したほどの遺構の検出はなかった。東側調査区では、東側ほど遺構面が浅くなっていることを再確認し、また集落も広がることが判明した。削平を免れた西側調査区では新たな古墳時代の溝を確認し、本荘北地区北側には古墳時代の溝が複雑に巡っていることが明らかになった。また0104調査地点で確認された弥生時代の

溝が北側にさらに延びることが確認できた。今後、弥生時代の遺構の分布がどのようなようになるのか、注目される。また、周辺の9901調査地点では黒曜石片が多量に出土しており、本調査区でも原石を打ち欠いた破片類が散見できる。今後、これまで遺跡の主体をなしてきた古墳時代から古代の遺構以外にも、弥生時代・縄文時代の遺構や遺物に注意を払う必要がある。

写真1 西側調査区全景（北より）



写真4 51号溝遺物出土状況（北より）



写真2 3号住居址（南より）



写真5 51号溝遺物出土状況（北西より）



写真3 15号溝全景（南より）



写真6 51号溝遺物出土状況（北西より）



写真7 0304調査地点出土遺物 (1/4)



Ⅱ—2 0302 調査地点

1. 遺跡の立地と周辺地形

本調査地点は熊本大学黒髪南地区の西側中央に位置し、黒髪遺跡群に含まれる。白川右岸の標高17mの地点にあたる。本調査地点の周辺で実施された既往の調査で、古代官衙関連の遺構と考えられる建物群や、0204調査地点では、本学内に存在が推定されている古代官道の側溝と思われる溝を検出した。9909調査地点（熊本大学埋蔵文化財調査室年報6）や0203調査地点（同9）では遺構検出面が下がり、土層堆積の様相が異なることが分かっていた。今回の調査区のうち、Ⅱ調査区は古代の遺構群と白川河川敷との間の様子を把握するに絶好の地点にあたり、古代道路の予想範囲に重なる可能性もあるなど、注目された。

2. 調査の概要

本調査地点は、平成15年度竣工予定の総合研究棟（現在建設中）の南北に、新たに共同溝を敷設する工事である。北側のⅠ区では0203・0210調査地点の調査結果により、遺構の残存状態はほぼ良好であることが予想された。調査区の一次掘削を8月4日から行い、6日より調査を開始した。古代の包含層は良好な状態で遺存していたが、該期の遺構や遺物はほとんど検出されなかった。包含層を除去し、地山を検出する段階で黒曜石の剥片・チップが出るため、調査区に1辺1mのグリッドを設定し、状況に合わせて拡張しながら地山を掘り下げた。その結果、縄文早期を中心とした土器・石器が多量に出土した。

Ⅱ区においては、9月25日に機械により掘削を行い、遺構検出面まで下げた。10月1日より、作業員を導入し、遺構掘り、壁面の清掃などを実施し、10月3日に作業を終了した。しかし、北半分において掘削幅が足りないことが判明し、およそ1mほど両側に拡張して再度、10月7日より10月10日まで、その部分の調査を実施した。

<調査面積>

Ⅰ区 168.2㎡

Ⅱ区 253.5㎡

<調査期間>

2003年8月6日～9月12日

2003年10月1日～10月10日

<調査員・参加者>

小畑弘己，大坪志子。

稲本佳子，岡田イツ代，黒木重信，黒木タケ子，小細

工洋子，溜淵俊子，西 信二，林田恵子，早田咲百合，堀川貞子，前田宏一郎，松井昭子，松本和徳，桃井哲夫。

3. 調査の結果

a 基本層序（図7）

Ⅰ地区周辺の大略の層序は、表土下1mまで現代埋土、その下に古代の遺物包含層があり、その下部が地山となる。調査区の中央付近で、地山と呼ぶ層（3層）の下に縄文時代の遺物包含層が2枚（4層・5層）が確認された。3層には縄文時代後・晩期の遺物が入ることは既応の調査で知られていたが、今回その下に縄文時代早期の遺物包含層があることが新たに判明した。

Ⅱ区の北半分は褐色土の地山面上に遺物包含層である黒色土が10cmほど堆積していたが、その上部は旧運動場建設のためほとんど削平されていた。また、この遺物包含層は、南側半分が近世以降に削平を受けており、当初、古代の遺構面がこの南側部分においても確認されると予想していたが、それに反してすべて削平を受けていることが判明した。

土層図（図10）の左半分の最下部の15層からは江戸期と思われる磁器の破片が出土し、44号溝より南側は削平されていることがわかる。北側調査区の黒色土の下部から黄褐色土上部にかけては、縄文時代後期以降の遺物を含む。調査区全体に広がる地山面上に堆積した黒色土は、この北側と南側とでは性格が異なる別の堆積物であることが調査終盤になって判明した。

よって、本来的な掘削面（自然の作用の可能性もある）は、調査区南側より下がる可能性があるが、今回はそれ以上掘削していない。

b 検出遺構と遺物

Ⅰ区

<溝>

1号溝

調査区南側1/3あたりを東西に走る幅1m、深さ0.48mの溝である。遺物はない。古代の包含層に掘り込まれており、中世以降のものであろう。

4号溝・5号溝・6号溝

調査区北部を平行に東西方向に走る。大きさはそれぞれ幅0.4m、深さ0.2m、幅0.66m、深さ0.3m、幅約4m、深さ約0.9mである。6号溝は南側の壁が緩やかに落ちて平坦面を作り、さらに一段落ちる。遺物はほとんどない。

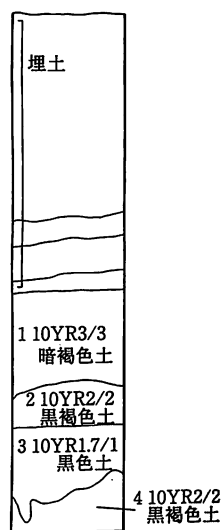


図7 基本土層柱状図

図8 黒髪南地区における調査地点配置図 (1/2000)

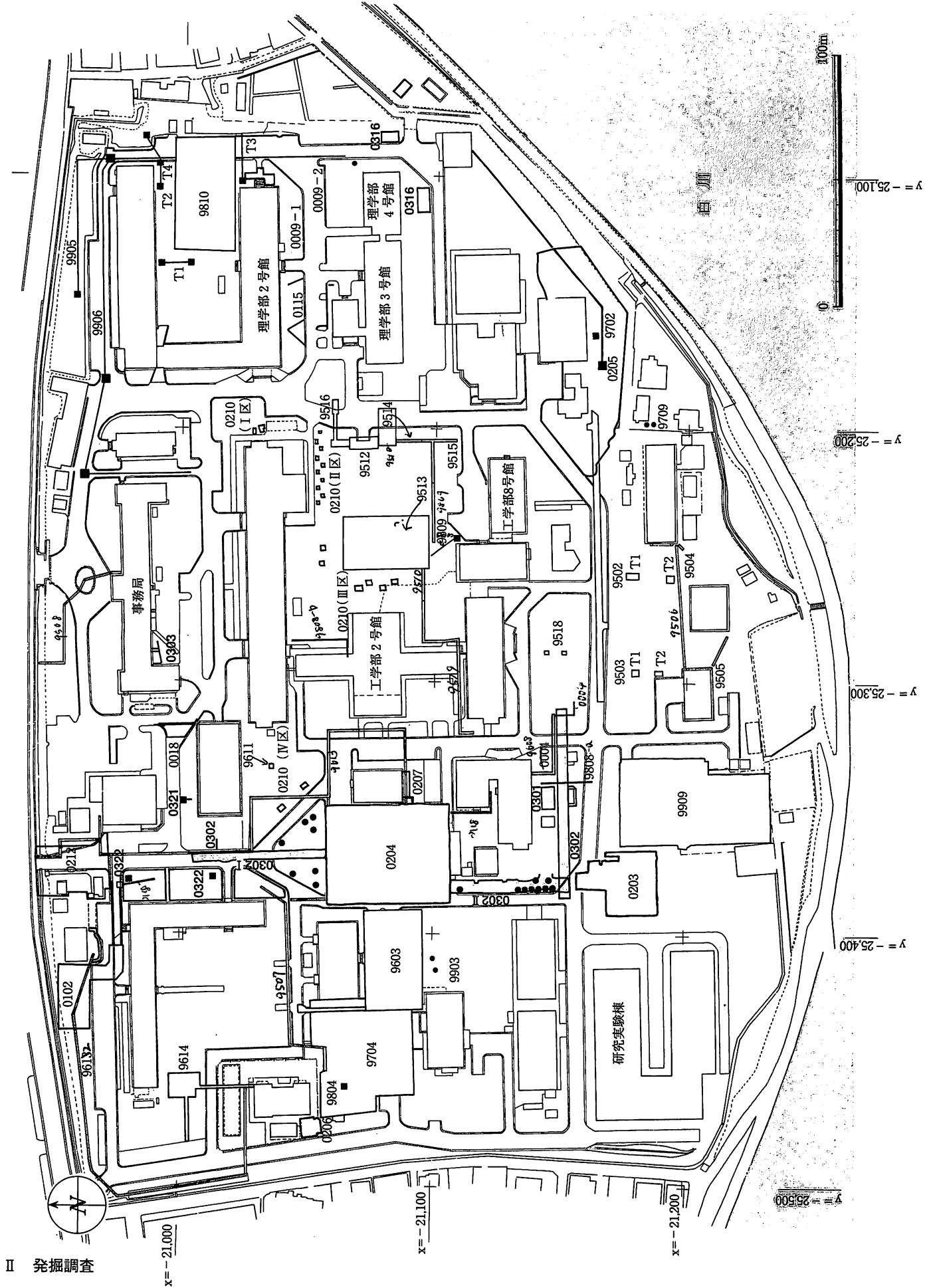


图9 0204・0302调查地点配置图・0302调查地点遺構配置実測图 (1/400・1/250)

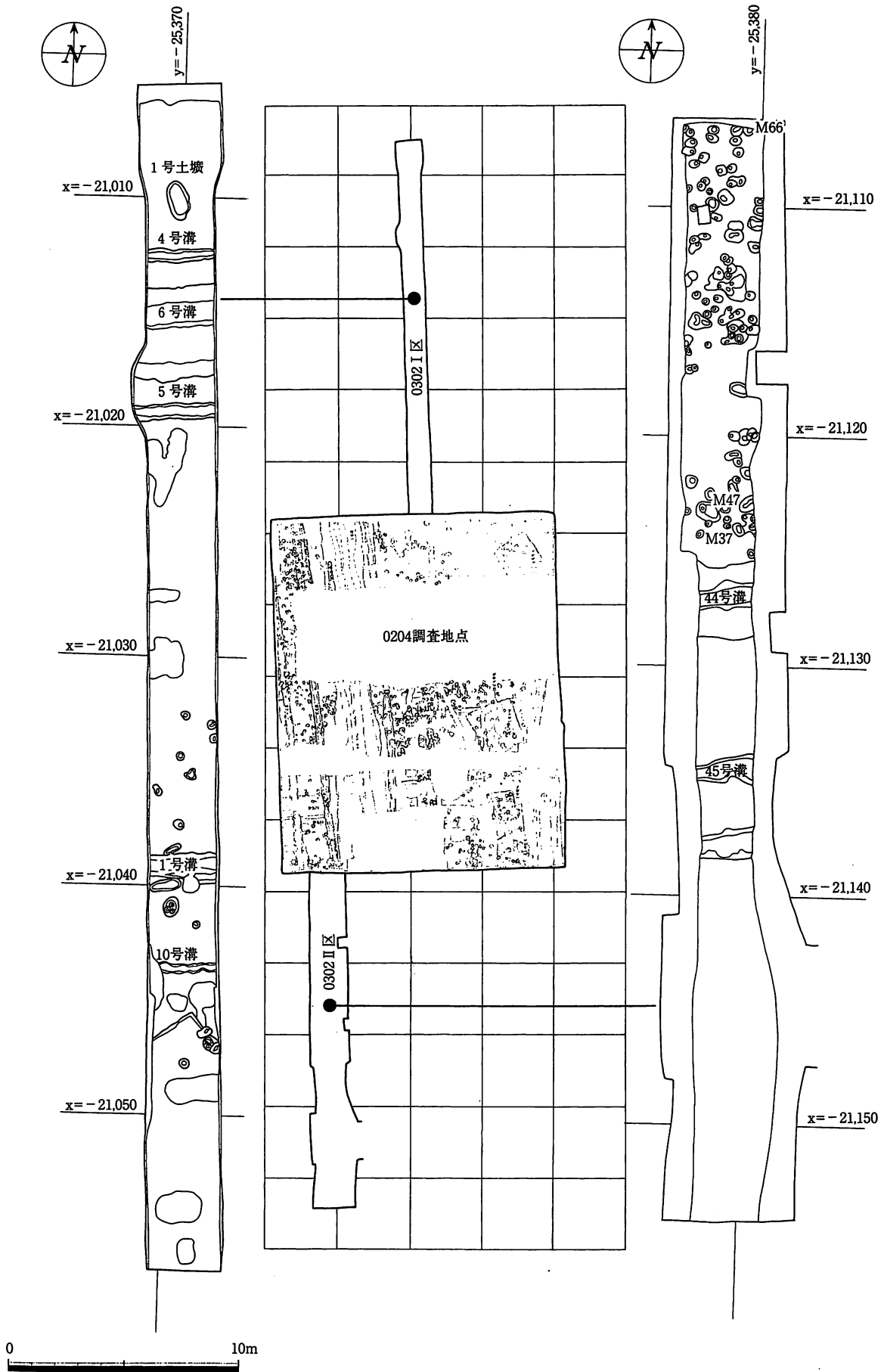
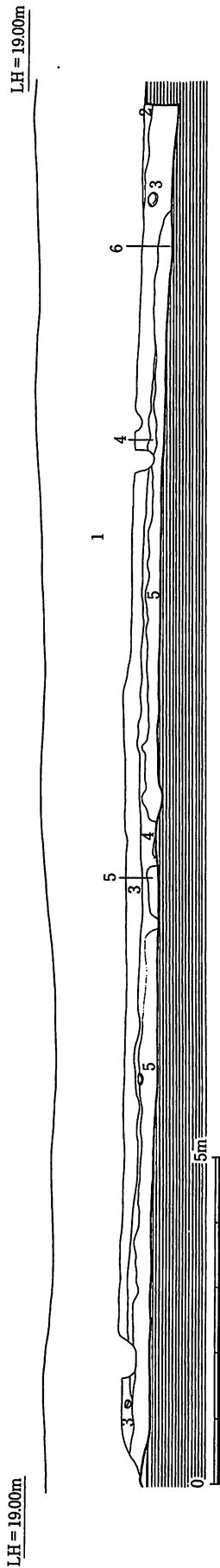
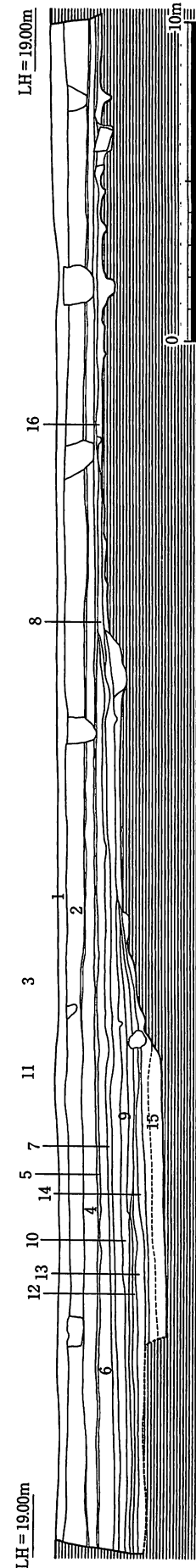


図10 0302 I 区東壁土層断面実測図・0302 II 区西壁土層断面実測図 (1/100・1/200)



- 1 古代以降の埋土
- 2 黒色土層 (10YR1.7/1)
- 3 黒褐色土層 (10YR2/3)
- 4 黒褐色土層 (10YR2/3)
- 5 黒褐色土層 (10YR2/2)
- 6 暗褐色土層 (10YR3/3)



- 1 埋土 (パラス)
- 2 埋土 (HueY3/1: オリーブ黒砂質土)
- 3 明赤褐色粘質土層 (Hue5YR5/6)
- 4 黒色砂層 (Hue2.5GY2/1)
- 5 明赤褐色粘質土層 (Hue5YR5/6)
- 6 黄灰色砂層 (Hue2.5YR4/1)
- 7 暗褐色土層 (Hue10YR3/3)
- 8 暗褐色土層 (Hue10YR3/3)
- 9 灰褐色土層 (Hue7.5YR4/2)
- 10 黒褐色土層 (Hue7.5YR3/2)
- 11 暗褐色土層 (Hue10YR3/3)
- 12 黒褐色土層 (Hue10YR3/2)
- 13 暗赤灰色土層 (Hue2.5YR3/1)
- 14 黒褐色土層 (Hue5YR3/1)
- 15 黒褐色粘質土層 (Hue7.5YR2/2)
- 16 黒褐色土層 (Hue7.5YR3/2)

图11 0302调查地点 I 区出土遗物实测图 (1/3)

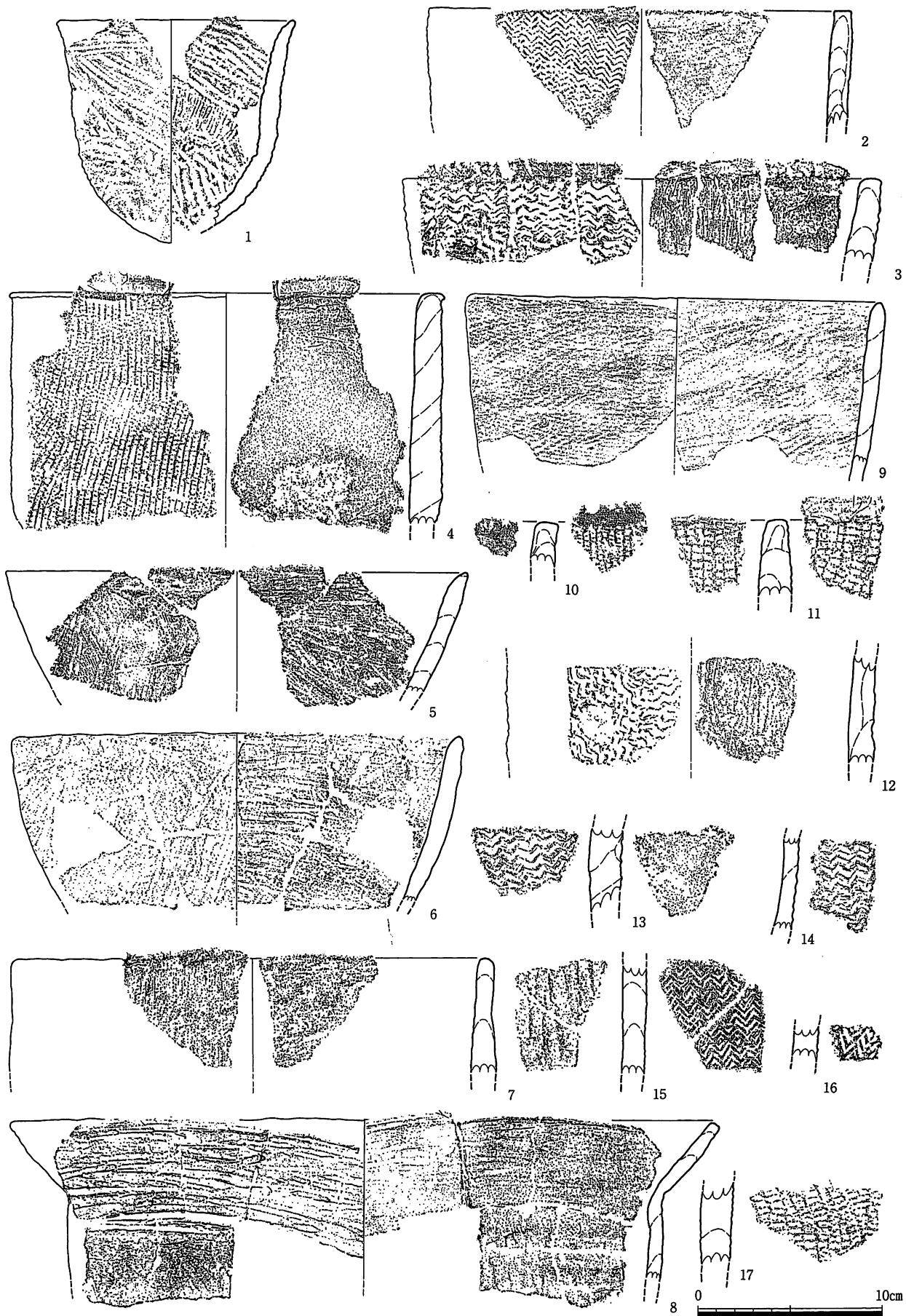


图12 0302調查地点 I 区出土遺物実測图 2 (1/3)

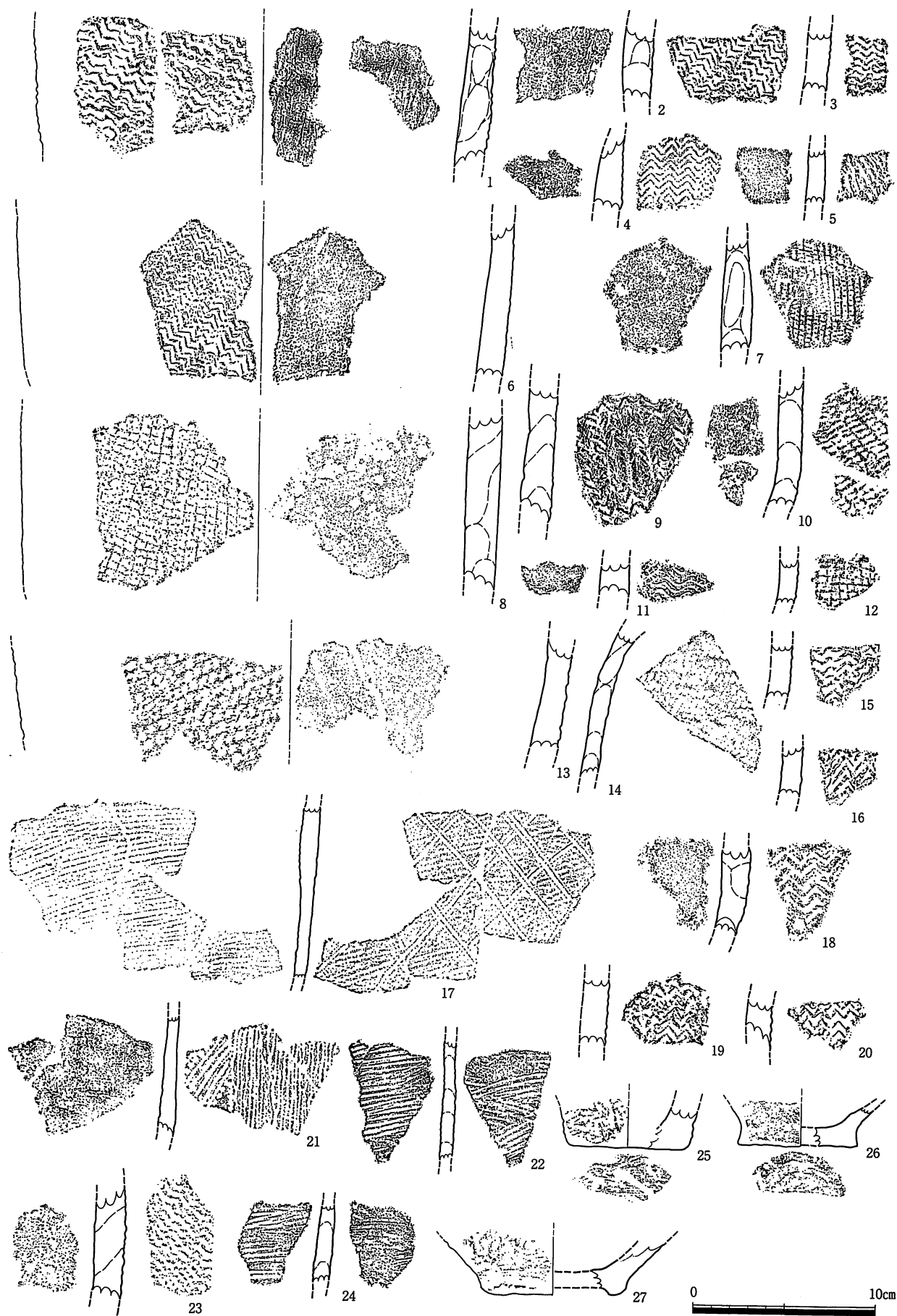
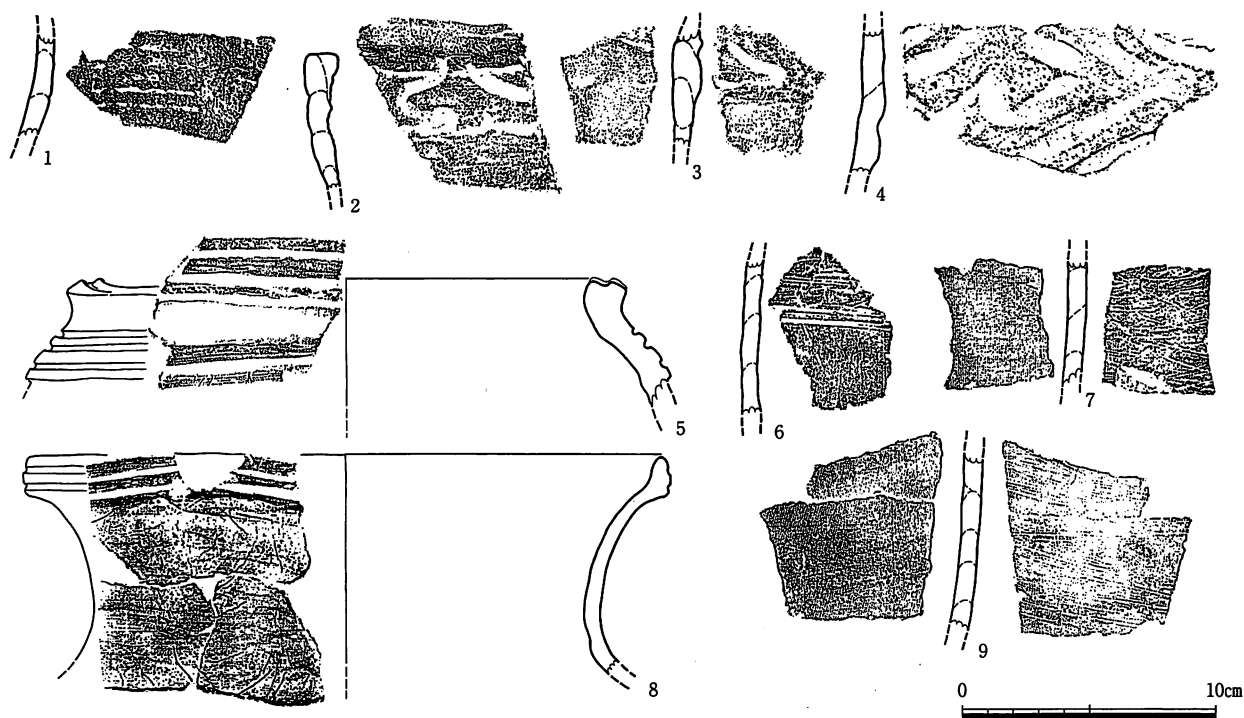


図13 0302調査地点 I 区出土遺物実測図 3 (1/3)



土層の観察より古代の溝と考えた。

<土坑>

2号土坑

調査区北に位置する、長軸約1.6m、幅1mの楕円形である。形状から墓墳とも考えたが、出土遺物がなくその性格は不明である。

<遺物>

今回新たに確認された縄文時代の遺物包含層から縄文土器と石器が総数760点出土した。調査区中央付近に集中していた。円筒形山形押型文土器、条痕文尖底鉢形土器など早期の土器を中心に僅かながら後・晩期までの土器がある。石器は黒曜石の剥片が最も多く、礫や石匙（縦型・横型）、石鏃などを含む。

II区

<溝>

44号溝

調査区中央をほぼ東西に走る幅3.5m、深さ50cmほどの溝である。中からは褐色釉を掛けた陶器鉢（図14：1）が出土した。近世以降のものと思われる。

<ピット>

調査区北半部を中心に多数のピットが検出された。ただし、すべて建物の柱として認定できるものではなく、中には樹根の痕跡も含まれる。ピット38から土師器甕片（図14：5）と弥生土器甕片（図14：8）、ピット47から

須恵器高坏（図14：3）、ピット66から弥生土器甕片（図14：9）が出土した。

このほか、北半部の黒色土層（16層）中から古代の土師器・須恵器の各種土器および弥生土器、縄文土器を検出した（図14）。この他同層下面より鉄鏃が1点出土している。

4. 成果と問題点

これまで、地山と呼ぶ土に縄文時代の遺物が含まれることは知られていた。しかし、今回I区で、この地山が少なくとも3層に分層できることが確認できた。本学内の調査において縄文時代の遺物がまとまって出土したのは今回が最初である。今後、遺物の精査を行って、各層の時期幅について検討したい。

また、II区においては南側段丘の境目とそれを巡る溝（堀）が検出され、思いのほか削平が著しいことが明らかになった。

图14 0302調查地点Ⅱ区出土遺物実測図 (1/3·1/4)

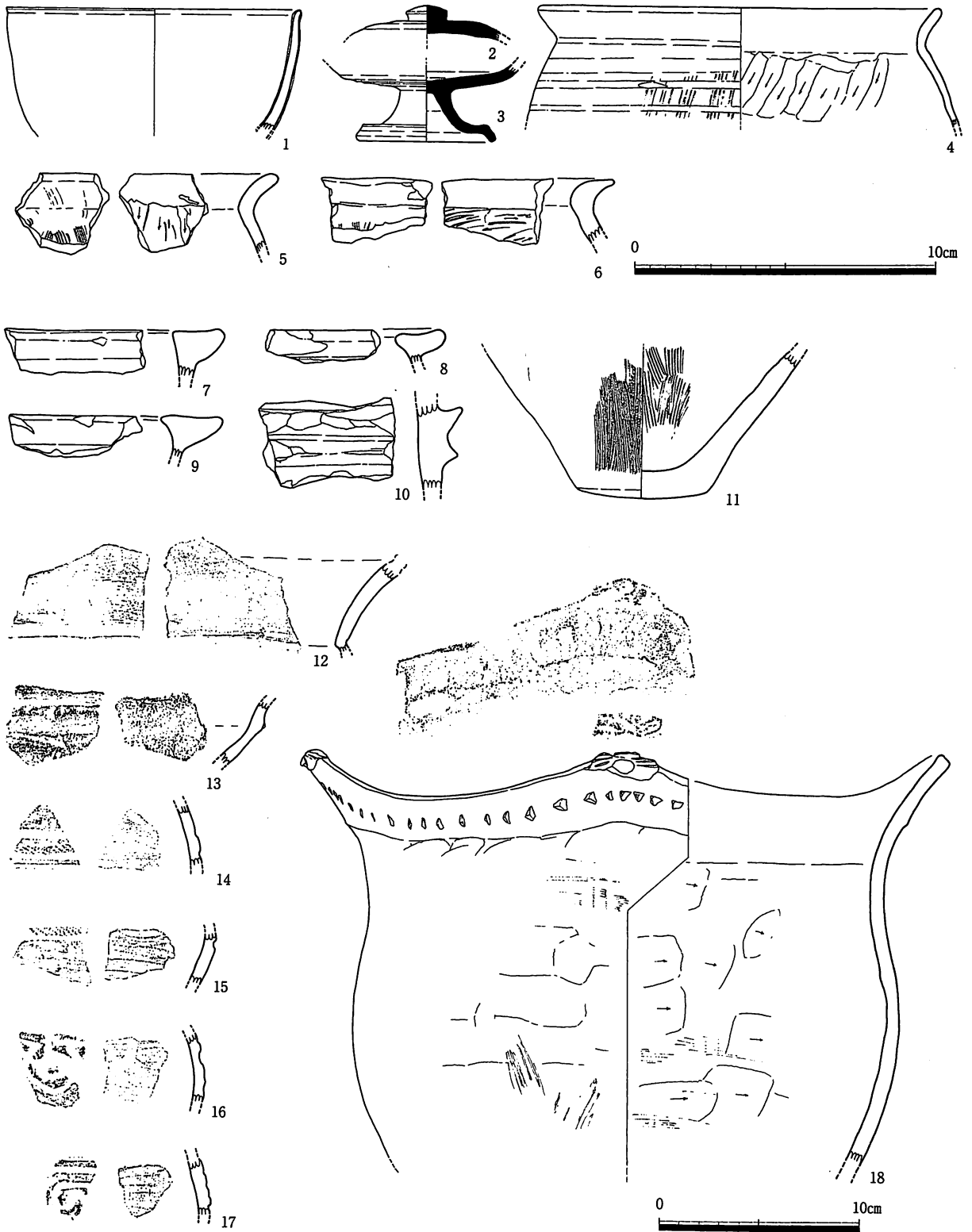


写真8 I区全景（南より）



写真11 縄文土器出土状況（北より）



写真9 遺物出土状況（西より）



写真12 石器出土状況（南より）

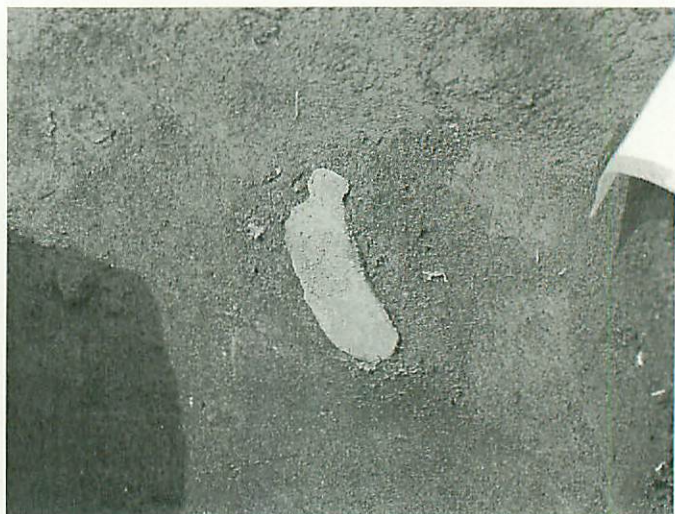


写真10 遺物出土状況（南より）



写真13 II区全景（北より）



写真14 II区見通し(南より)



写真16 II区西壁土層②(東より)

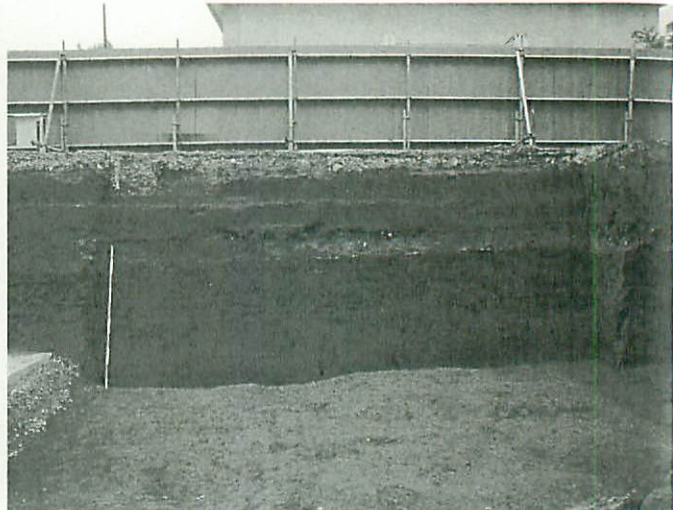


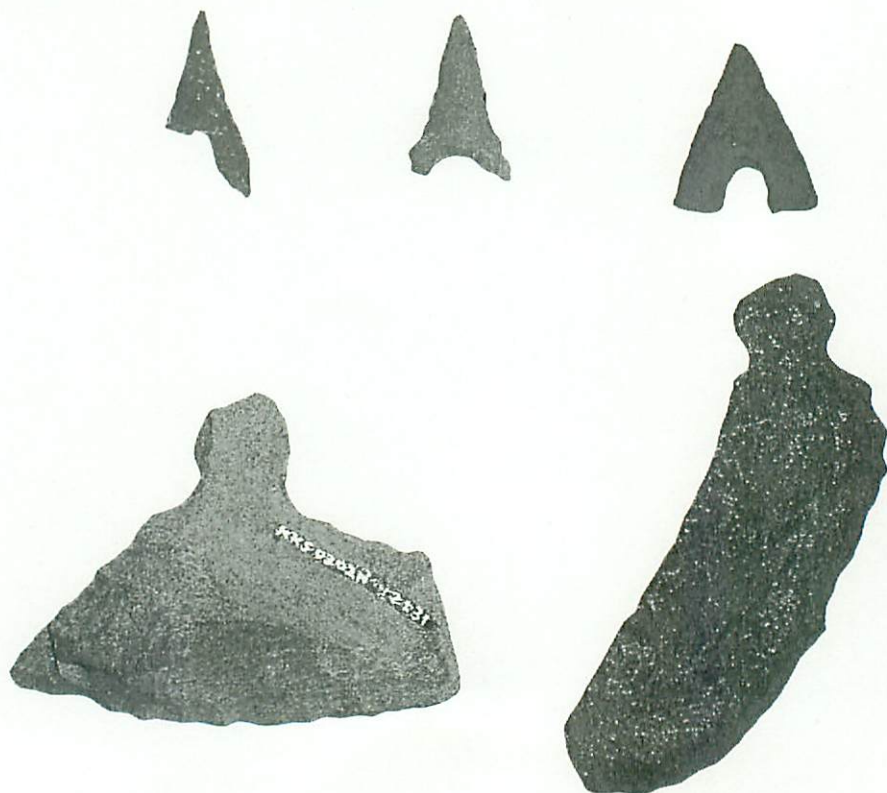
写真15 II区西壁土層①(東より)



写真17 遺物出土状況(南より)



写真18 0302調査地点I区出土遺物



II—3 0314 調査地点

1. 遺跡の立地と周辺地形

本地区に所在する本庄遺跡は、熊本市遺跡地図No.8-95の熊大病院敷地遺跡として周知されている遺跡である。その南部に展開する医学部構内においては、1995年度に実施したアイソトープ実験棟建設に伴う発掘調査(9511)の結果、8世紀代を中心とする竪穴住居址群と縄文時代後期の遺物包含層が確認され、本医学部構内も遺跡包蔵地に含まれることとなった(熊本大学埋蔵文化財調査室年報2)。

また、1998年度に実施した医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター関連図書館解体工事に伴う発掘調査(9801)の結果、7世紀後半～9世紀の竪穴住居、掘立柱建物、溝、9世紀後半の土坑を中心とする遺構群が検出され、本地区において広範に遺構が展開していることが明らかにされた(熊本大学埋蔵文化財調査室年報2)。

遺跡一帯は白川左岸の低位の河岸段丘上(標高12～13m)に位置し、白川の蛇行にともなって、平坦な突出した岬上を呈する地形である。本地区は白川から派生する支流(堀・小河川)が巡る地域にあたり、それらに取り囲まれた部分に古代を中心とした居住区が営まれている。

2. 調査の概要

本調査地点は、2003年度に開始されたPFI事業による発生医学研究センター建設の整備事業の一環として実施された基礎研究棟B棟と基礎研究棟E棟の解体工事に伴う発掘調査である。隣接地で実施した1998年度の医学部エイズ学研究センター建設に伴う図書館の解体工事の際は、基礎撤去後に現場において埋蔵文化財の有無を確認したが、基礎撤去に伴いすでに削平されていた。このため、今回は建物上物の撤去後、基礎部分において試掘を行い、埋蔵文化財の有無を確認することとした。12月23日、B棟解体時に、試掘を実施した。この部分は地下室となっていたが、基礎掘削部の間に旧地表面が比較的良好に残存していることを確認することができた。このため、基礎上部の撤去後に機械を入れて確認したところ、一部に遺構が残存していることが判明したため、すぐに発掘調査に切り替え、調査を実施した。

E棟においても、B棟での経験から、遺構が残存する可能性が高いため、施工業者と協議の上、基礎上部撤去後、3月5日に試掘を実施した。この結果、一部において遺構を検出したため、発掘調査に切り替えた。B棟部

分をI区、E棟部分をII区と呼称し、遺構番号は連続して付した。

<調査面積>

I区 700㎡

II区 300㎡

<調査期間>

2004年1月23日～1月27日

2004年3月5日～3月9日

<調査員・参加者>

小畑弘己。

河野義勝、白石美智子、溜淵俊子、林田恵子、早田咲百合、番山明子、松井昭子、森川征子、森川護。

3. 調査の結果

a 基本層序

I区・II区ともいずれの調査区も地表下2mほど削平されていたが、黄褐色の地山(遺構面)と称する土壌は残存していた。しかし、10cmほど掘り下げるとシルト質が強くなり、灰黄褐色～淡緑灰色のシルト・砂層へと移行する。このため、堆積層の上部がかなり削平されていることがわかる。もっとも深い溝(5号溝)が硬いシルト層を貫き、その底は灰褐色粗砂層まで達していた。

b 検出遺構と遺物

<遺構>

<溝>

5号溝

II区中央部を東西に走る幅2m、深さ0.60mの溝である。断面形は台形状を呈する。16世紀後半の明染付碗や陶器挿鉢の破片が古代の土器片などとともに出土した。方向と位置関係から9511調査地点の北西隅で検出された10号溝に繋がるものと思われる。溝の形状および出土遺物の種類も一致する。

6号溝

II区中央部を東北東から西南西方向に走る幅0.5m、深さ7cmの小溝である。遺物は土師器・須恵器の小片があるのみであるが、9511調査地点の55号溝に連続する。断面形は浅いレンズ状を呈する。8世紀後半代の住居址に切られていることから、時期はそれより遡る可能性がある。

7号溝

II区北側を北東から南西方向に走る断面形逆台形の幅1.0m、深さ15cmの溝である。土師器小片が出土した。位置関係から9511調査地点の19号溝に連続するものと思

図15 本荘南地区における調査地点配置図 (1/2000)

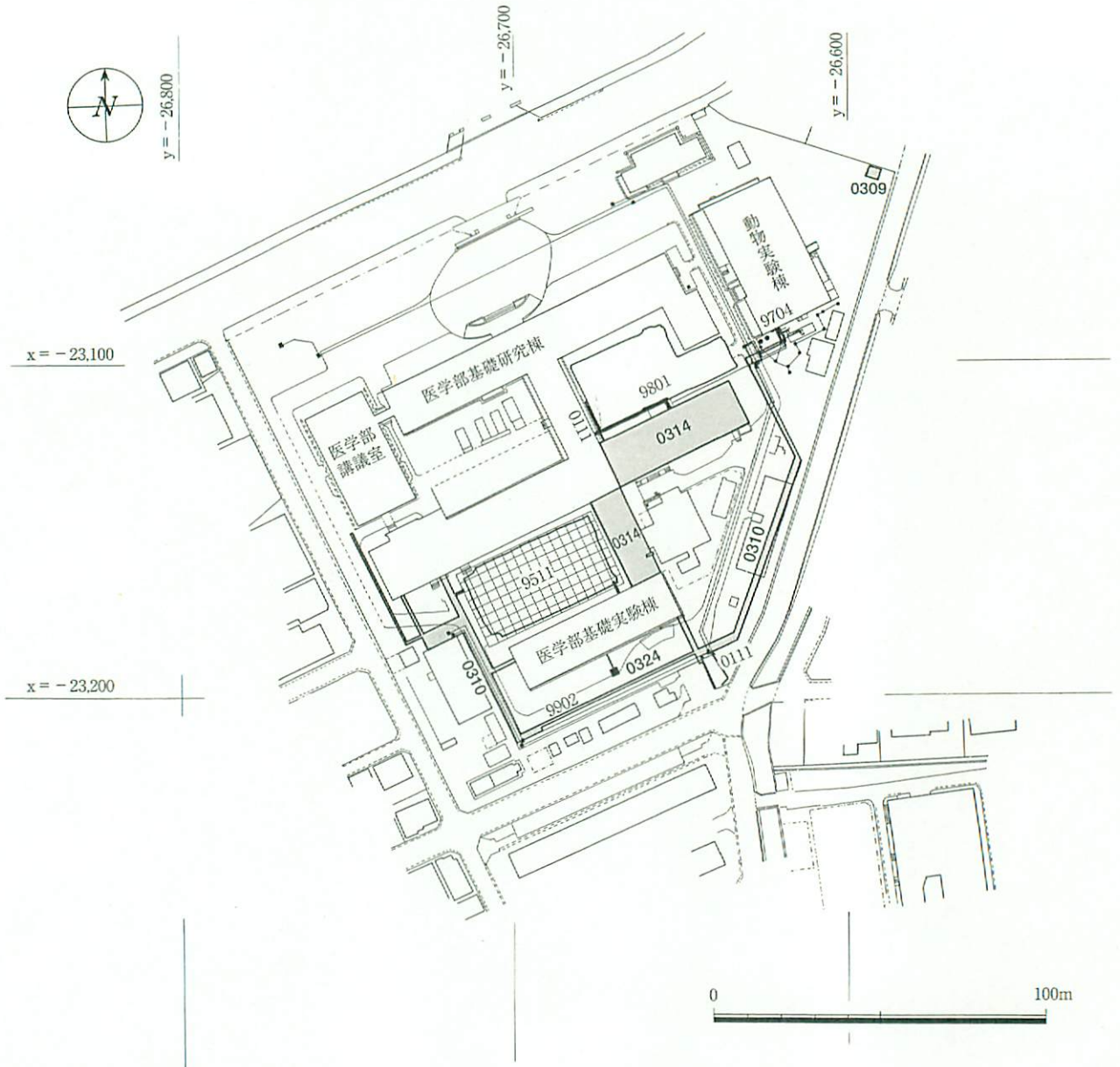


写真19 I区全景 (西より)



写真20 II区全景 (南より)



図16 0314調査地点遺構配置実測図 (1/450)

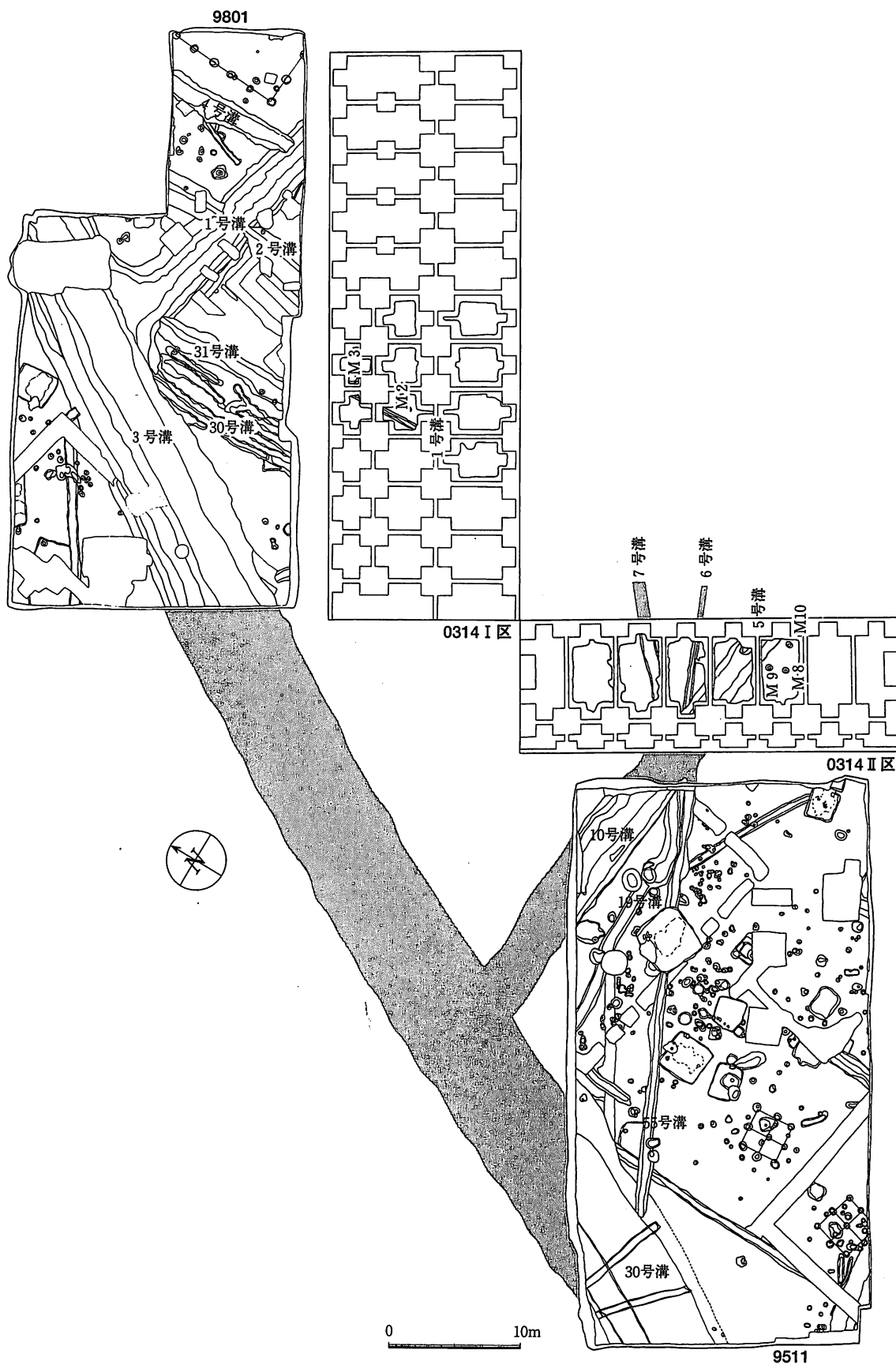


写真21 II区調査風景（南より）



写真23 II区5号溝（東より）



写真22 II区5号溝土層堆積状況（東より）

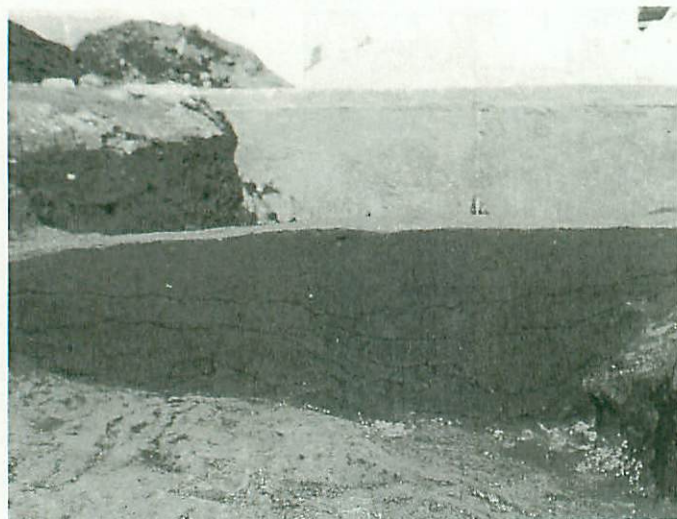
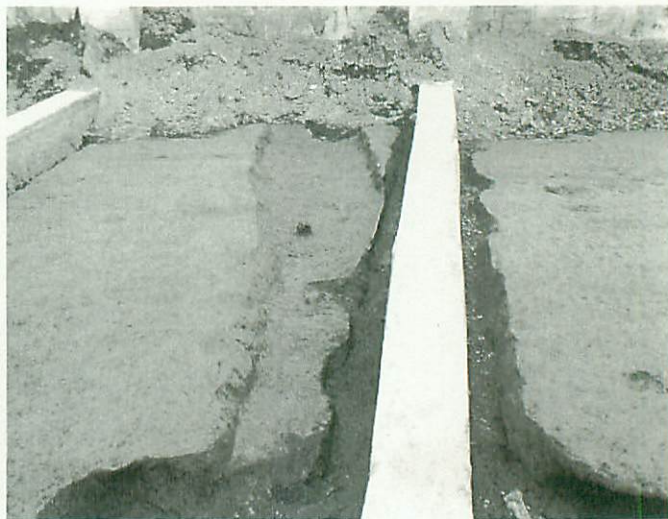


写真24 II区7号溝（西より）



われる。9511地区での切り合い関係から、6号溝より新しいものと思われる。

1号溝

I区中央部西よりの部分で検出した幅0.4m、深さ5cmの断面形が浅いレンズ状をなす溝である。方向は南北方向に走る。9801地点の状況からみて同地点の30号～32号溝と一連の性格をもつものと思われるが、北側延長した部分の9801点の調査区内には延長部と思われる部分は検出されていない。時期の詳細は不明であるが、覆土の状況から古代のものと思われる。

このほか、I区において2個、II区において3個のピットを検出した。II区において検出した3個のピット(M8～M9)は一連の構造物である可能性もある。遺物は1点も検出できていないが、覆土は黒褐色であり、本地点でも古い部類に入り、古代以前の時期が考えられる。

4. 成果と問題点

今回の調査によって、医学部敷地内の東南側部分においても遺構が残っていることが判明した。この地区の調査に関しては、今後I区とII区に挟まれた部分において新築建物の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査が予定されているので、今後の調査の成果を待って総括することにする。

今回の調査成果は、調査法に関する既存概念の訂正であろう。つまり、既存建物部分であっても、地表下2m前後であれば、遺構が削平を一部免れて残存していることが明らかになった点にある。これは、今後、建物新設のみならず、既存建物の解体に際して、基礎を撤去する際には、必ず埋蔵文化財の有無を確認する必要があることを実証したもので、今後の学内整備の計画の際に留意すべき点である。